論　文　概　要　書

D・H・ロレンスとナショナリズム

―『虹』以降の主要作品にみるネイション＝ステイト観

三　宅　美　千　代

論 文 概 要 書

D・H・ロレンスとナショナリズム
―『虹』以降の主要作品にみるネイション＝ステイト観

三 宅　美 千 代

1．本論文の目的と方法

本論文『D・H・ロレンスとナショナリズム―『虹』以降の主要作品にみるネイション＝ステイト観』は、19世紀のヨーロッパ内外でのネイションの形成とナショナリズムの台頭が、イギリス人作家D・H・ロレンス（D. H. Lawrence, 1885-1930）の執筆活動にどのような影響を与えたかを検証したものである。19世紀以降の世界規模でのナショナリズムの台頭という歴史的パースペクティヴのなかにロレンスの作品を位置づけ、『虹』以降の主要な長編小説を中心に著作の再読を試みることで、近代西欧で確立したネイション＝ステイトという統治形態への批判と、それを超える政治共同体の探求が小説を書くという実践においていかに試みられているかを明らかにした。

近代西欧で確立したネイション＝ステイトは、第一次世界大戦の総力戦体制において、国民の包摂と非国民の排除という二面性を露わにし、巷では大衆ナショナリズムと外国人排斥運動が高まりを見せた。戦後は、ウィルソン大統領の唱えた民族自決の理念に従って、各地で少数民族の独立運動が活発化した。ロレンスは大戦直後にイギリスを離れて移動を続けたが、出かけた先々でナショナリズム運動に遭遇し、作品の題材とした。本論文各章で取り上げた『虹』(1915)『アーロンの杖』(1922)『カンガルー』(1923)『羽毛の蛇』(1926)『アポカリプス』(1931) には、イギリス、イタリア、オーストラリア、メキシコのナショナリズム運動の動向が詳しく書き込まれている。

先行研究は、ロレンスのナショナル・アイデンティティやネイションとの関係に繰り返し言及してきたが、ネイション＝ステイトという政治共同体について、作家がどのような見解を持っていたのかには十分に触れてこなかった。また、批評家は作家とネイションの関係をヨーロッパ内部の問題として、とくにブリテン帝国との関係に限定する形で論じてきた。しかし、近年のナショナリズム研究が明らかにしているように、ネイション概念とナショナリズムは、国・地域ごとにその成立条件・形成過程・特徴・文脈を異にするものであり、それらを一括りに論じることはできない。とくに、第３章、第４章で扱うオーストラリアとメキシコのナショナリズムに関しては、ヨーロッパからの脱植民地化の過程がネイション形成の議論に深く関わっている事実を無視することはできない。各国のナショナリズムのイデオロギーと権力関係、さらにブリテン帝国人である作家の国籍がそれぞれの国家・民族・政治組織とのあいだに作り出す共感や衝突、葛藤を踏まえたうえで、それぞれのナショナリズムが作品でどのように扱われているかを調べる必要が

ある。

以上のような問題意識に立ち、本論文ではナショナリズムの多様性を踏まえて作品分析を行なった。第１章以降の各章では、作家の訪れた各国のナショナリズムをめぐる状況―ネイション＝ステイトの成立事情・過程、ネイション概念の特徴や問題点―を個別に再構成し、ローカルな視点からとらえた歴史・社会・文化的文脈に作品を置いて、作家がそれぞれの国民共同体形成の場にどのように立ち会ったのかを検討した。複数のナショナリズムと作家の関わりに光を当てることで、ロレンスがそれぞれのネイション概念やナショナリズムの特徴・問題点を適切に理解した上で、欧米列強のナショナリズム、帝国支配に抵抗する植民地のナショナリズム（そのなかでもさらにオーストラリア、アメリカ合衆国、メキシコ、アイルランドでは事情が異なる）を書き分けていることが明らかになった。

2. 本論文の内容

本論文の全体の構成は、以下の通りである。

序章
　第１節 本研究の目的と問題の所在
　第２節 課題と視座
　第３節 総力戦体制、大衆デモクラシーとロレンス
　第４節 本研究の構成
第１章　移民と帝国のナショナリズム―移民の物語として読む『虹』
　はじめに
　第１節 作品の歴史的背景
　第２節 帰属意識とポーランド・アイデンティティの継承
　第３節 移動生活者とネイション＝ステイト批判
　小括
第２章　ナショナリズム批評装置としての音楽―『アーロンの杖』再読
　はじめに
　第１節 コンサートとプロパガンダとしての音楽
　第２節 家庭演奏会と帝国主義
　第３節 民俗文化、古楽の復興とナショナリズム
　小括
第３章 『カンガルー』とコロニアル・ナショナリズム
　はじめに

第１節 オーストラリア・ナショナリズムとアンザック
第２節 『カンガルー』に描かれるコロニアル・ナショナリズム
第３節 民主主義と少数者
第４節 物語の余剰としての少数者たち
小括
第４章 革命期メキシコのナショナリズムと『羽毛の蛇』
はじめに
第１節 革命期メキシコのナショナリズム
第２節 『羽毛の蛇』分析
第３節 祭儀と伝統の創造
第４節 ナショナリズムにおける古代の利用―ファシズム政権への批判
第５節 「ケルト」の眼差し
小括
第５章 福音主義ナショナリズム批判としての『アポカリプス』
はじめに
第１節 千年王国論とナショナリズム
第２節 ロレンスと千年王国論
第３節 小説と黙示録的想像力
小括
結論
参考文献
図版一覧

序章では、本論文全体の枠組みとなる議論や問題点を整理した。小説が近代ヨーロッパでのネイション＝ステイトの確立、ナショナリズムの勃興と密接な関係をもち、ネイションという「想像の共同体」を創出するうえで一定の役割を果たしたことについて述べた。さらに、ロレンスが作家として活動していた20世紀初頭までのブリテン島におけるネイション、ナショナリズムの形成と発達、その特徴を明らかにした。作家とネイション＝ステイトの関わりを表わす出来事として、第一次世界大戦の総力戦体制下で、ドイツ人の妻を持つことからスパイ容疑をかけられ、非-国民として警察の監視下に置かれたことが挙げられる。このときの経験は、ネイション＝ステイトが内包する国民の包摂と非-国民の排除という二面性と暴力性を作家に知らしめ、近代的ネイション＝ステイト体制とナショナリズムに対する猜疑心と反発を植え付けた。その結果、戦後にヨーロッパ内外でさまざまなナショナリズム運動に遭遇したときにも、多数派を形成する国民の団

結によって抑圧と不利益を強いられる少数者の側に立ち、客観性と批判精神をもって対応することになった。

第１章 移民と帝国のナショナリズム―移民の物語として読む『虹』

第１章では、ポーランド人移民とイングランド人の三世代にわたる家族生活と、婚姻関係による混血化を扱った『虹』を題材に、作家のネイション、ナショナリズムについての考えを検討した。はじめに、作品の歴史的背景―分割統治期のポーランドのナショナリズム運動、19 世紀から 20 世紀にかけてのイギリス社会へのポーランド移民の流入状況、大戦前夜にかけてのイギリスでの外国人排斥運動の台頭と、ネイション＝ステイトにおける移民の不安定な立場―を再構成し、その内容を踏まえて、作品分析を行なった。

『虹』は、ポーランド移民の各世代がブラングウェン家との婚姻関係を通してイギリス社会に根を下ろしていく過程を描いた物語であり、移民の増加に伴い多民族化が進むイングランドを描いている。異国での生活に馴染めない移民一世（リディア）から、幼くして故郷を離れ新しい土地にたくましく根づいていく二世（アナ）を経て、イギリスで生まれ育った三世（アーシュラ）になると祖国とのつながりは希薄になっていく。しかし、一世の存在を通して、ポーランド語やポーランド・ナショナリズムの記憶を含むエスニック・アイデンティティが世代間で確実に継承されていく様子が記されている。

複数の帰属先とアイデンティティを持ち、ネイション＝ステイトの境域に位置する移民を物語の中心に据えることで、民族と国家の一致というネイション＝ステイト体制の前提には揺さぶりがかけられる。しかも、この作品が大戦期にナショナリティの区分が明瞭化されるのに伴い、移住者や外国人に対する圧力が強化され、ネイション＝ステイトにおける彼らの周縁・外部性が可視化する中、執筆されたことの意味は大きい。

とくに、作家は移民三世のアーシュラにイギリスのナショナリズムを超克する役割を託している。アーシュラはネイションへの非帰属を貫く人物であるが、同じ移民出身のスクレベンスキーはそれとは対照的に、ネイション＝ステイト内の移民の地位の不安定性から、ネイションへの帰属と植民地戦争への積極的貢献が必要であると訴える。前者による後者の批判を通して、ロレンスはナショナリズムが移民や自治領・植民地住民といった国家の周縁や境域にある者をも含めて醸成されることを示唆し、その上でブリテン帝国全体のナショナリズムを批判している。また、「ノマド」的志向をもち、ネイション＝ステイトの枠組みに挑戦する移民出身のアーシュラを物語の中心に据えたことは、中・後期の作品で、ネイション＝ステイト内部の少数者に共感的な立場から、ナショナリズムを扱っていることとも一貫している。

第２章 ナショナリズム批評装置としての音楽―『アーロンの杖』再読

第２章では、大戦直後のイギリスとイタリアでの経験をもとに書かれた『アーロンの杖』の音楽表象に注目して、大戦後の政治的混乱と頽廃的雰囲気のなかヨーロッパ各地で台頭したナショナリズムに対する作家の反応と見解を検討した。

主人公アーロンはフルート奏者であり、作品には劇場公演と家庭演奏会という二種類の音楽実践をめぐる言及が数多く鏤められている。本論文では、19 世紀以降のヨーロッパにおける音楽の産業資本主義化とネイション＝ステイト体制の確立の相互関係を踏まえて、それらの音楽表象を音楽社会学的視座から検討した。作中の音楽表象は一見無作為にも見えるが、音楽作品や公的・私的な演奏空間が、帝国主義、産業資本主義、ナショナリズムといった政治的イデオロギーに市民を画一的に包摂する場となりうることに対する批判と警鐘が込められていることを明らかにした。

『アーロンの杖』の音楽表象に注目すると、作家が音楽を政治と芸術の交錯する場として描くことにかなり意識的であったことがわかる。ロレンスは音楽とは美学的、審美的なものであると同時に、帝国あるいは国家権力への同調を促す社会的、政治的道具ともなりうるという認識を持っていた。さまざまな音楽生成の場に横断的に関わりつつ、すべての場所から逃走をつづける音楽家アーロンの姿から、芸術が帝国主義、産業資本主義、ナショナリズムと共犯関係を結び、権力や国家のイデオロギーに追随するものであってはならないという作家ロレンスの断固たる決意が読みとれる。

第３章 『カンガルー』とコロニアル・ナショナリズム

第３章では、英連邦内の白人自治領であるオーストラリアのナショナリズムとネイション概念を踏まえて『カンガルー』を分析した。『カンガルー』と第４章で扱った『羽毛の蛇』は、現地の政治情勢をほとんど考慮することなく読まれてきた結果、指導者原理の側面が強調され、作家のファシズムへの傾倒を示す作品とされてきた。しかし、オーストラリアとメキシコのネイション概念とナショナリズムの特徴を踏まえ、作品を適切な歴史・社会・文化的文脈に置くことで、これまでとは異なる作品解釈の可能性が見えてくることを指摘した。

オーストラリアのナショナリズムは白豪主義、帝国依存体質、人種主義的排外性を特徴とする。大戦期以降は、アンザック軍団や帰還兵を英雄・神話化することにより、白人男性を標準としてネイション概念が形成された。そうして創出された国民概念は、女性と先住民アボリジニーを疎外する傾向にあった。『カンガルー』に登場する二つの政治組織（ディガー・クラブと労働党）は、白豪主義と英豪間の格差を前提とし、先住民と女性を政治的議題としても議論の参与者としても不在化しているが、これはオーストラリア・ナショナリズムのヨーロッパ中心主義、男性中心主義的な特徴を的確にとらえたものと言える。

オーストラリア・ナショナリズムの権力関係において、イギリス人男性である主人公サマーズ

は特権的な地位を与えられ、連邦国家の白人性と人種・民族的少数者排斥の方針に承認を与える存在となる。しかし、ロレンス同様、サマーズは戦時下のイギリスで非-国民化されるトラウマを経験し、祖国とのつながりを失ったと感じているため、白豪主義者がサマーズに対して抱く期待や思惑を受け入れることができない。むしろ、彼は両組織の掲げる民主主義の欺瞞や虚偽性を批判する側にまわる。

『カンガルー』は、白人男性主導のネイション形成において声が与えられない少数者となっていたアボリジニーと女性を独特のやり方で物語内部に招き入れている。彼たち／彼女たちの存在はプロットと直接関係のない、物語のいわば余剰として書き込まれ、彼たち／彼女たちのネイション＝ステイトにおける外部者性が読者に突きつけられている。その記述は、オーストラリア・ナショナリズムの事情を精確に差し出しているだけでなく、ヨーロッパ・男性中心主義的なナショナリズムの絆が、先住民と女性を排除する力作用となりうることに作家が自覚的であったことを意味している。

第４章 革命期メキシコのナショナリズムと『羽毛の蛇』

第４章では、インディヘニスモと呼ばれる革命期メキシコのナショナリズムの特徴とネイション概念を踏まえて、『羽毛の蛇』を分析した。20 世紀初頭のメキシコでは、欧米資本による帝国主義の撃退と、ネイション＝ステイト体制への移行を目指し、植民地時代やディアス政権期にはメキシコの後進性の象徴とされた先スペイン期文化と混血主義をアイデンティティの核に据えたナショナリズム政策が推進された。

メキシコ滞在中、ロレンスはインディヘニスモに関心を示し、作品の題材とした。作中のケツァルコアトルの運動は、きわめて独創的なやり方においてではあるが、20 世紀初頭のメキシコの政治情勢、インディヘニスモの概念の的確な理解のうえに書かれたものである。混血主義の理念、古代メキシコの文化復興、カトリック教会との緊張関係を含め、ケツァルコアトルの運動はインディヘニスモを下敷きに造形されている。これまで多くの読者を困惑させてきた祭儀描写についても、ポストコロニアル期のメキシコにおけるネイション形成と新たな伝統の創出を描いた場面として解釈できることを示した。古代メキシコ文化の祭儀の復活は、国民的伝統の創造、ナショナル・アイデンティティの醸成、国民的歴史認識の確立というかたちで、ポストコロニアル期のネイション形成に貢献するものとして描かれている。

主人公ケイトはアイルランド人であり、独立運動の活動家を前夫として持つ人物とされる。その彼女がメキシコでケツァルコアトルの運動に参加するという物語の展開は、英米の拡張主義政策の被害者であり、脱植民地化の途上にあったメキシコとアイルランドのサバルタン・ナショナリズムを併置的に眺める視座をもたらす。『羽毛の蛇』は二つのサバルタン・ナショナリズムの連帯の物語であり、ケイトのアイルランド性についての言及には作家の特別な期待と思惑が込めら

れていることを示した。

『カンガルー』と『羽毛の蛇』がナショナリズムを扱った作品であることを踏まえると、主人公がいずれも現地の政治運動との関わりをめぐって最後まで態度を留保しつづけることは、ナショナリズムのイデオロギーに与しない態度の表われとして大きな意義をもつ。ロレンスはとりわけメキシコのサバルタン・ナショナリズムに共感を寄せていたことがうかがえるが、それでもナショナリズムを無条件に肯定することには躊躇を示し、批判精神を捨てることはなかった。

第５章 福音主義ナショナリズム批判としての『アポカリプス』

第５章では、英米のナショナリズムと作家の関係を論じた。自由民主主義とピューリタニズムを理念とする英米のナショナリズムを宗教・レトリックの面で支えていたのが黙示録とダニエル書の解釈に基づく千年王国思想である点に着目して、ロレンスの黙示録理解・表象が英米のナショナリズムに対する批評として機能していることを明らかにした。

ロレンスの黙示録との関わりは宗教的なものだと考えられ、『アポカリプス』はこれまで宗教的著作として扱われることが多かったが、本論文ではこのエッセイの政治イデオロギーとしての側面に注目し、ロレンスの黙示録論がナショナリズム、民主主義、キリスト教福音主義の交差する地点において成立するものであることを示した。

このような作家の黙示録理解は、『カンガルー』『羽毛の蛇』『セント・モア』における黙示録的言及や千年王国的モチーフという形で小説的実践につなげられている。これらの作品で、黙示録的口調はおもに欧米の帝国支配に対するサバルタンの抵抗を描く際に用いられている。キリスト教徒ではない人物の科白に黙示録的言い回しを採用して「キリスト者」と「反キリスト者」の区別・ヒエラルキーを逆転させたり、オリジナルのテキストに本質的変更を加えて、排他的他者認識を無効化するなど、本来の文脈をずらしたかたちで援用されている。このような黙示録のサバルタン・ナショナリズムへの転用は、キリスト教徒を善とし、それ以外を異教徒、すなわち「悪」として断罪する二元論的価値判断を反転させ、英米のナショナリズム概念に批評的に介入するものであることを示した。

ロレンスの黙示録理解、及び、小説作品において行使される黙示録的想像力は、自由民主主義と福音主義的伝統が交差する地点に根を下ろす英米のナショナリズムのもつ偏狭な排他性に対する根本的な批判である。そこには、異質なものをそれ自体として在らしめることなく、ただ交戦し征服するべき「悪」と見なす、黙示録的伝統に支えられた西欧のナショナリズムと他者認識に対する批判が込められている。

『虹』以降の主要作品での多種多様なナショナリズムの取り扱いを見てみると、作家の関心が特定のナショナリズムのイデオロギーを擁護することにないことは明らかだ。欧米のナショナリ

ズムであれ、サバルタン・ナショナリズムであれ、明白な否認、あるいは主人公の態度の留保というかたちで、作品はつねに政治的ナショナリズムのイデオロギーに対する懐疑と批判を内包している。サバルタン・ナショナリズムに関しても、ポーランドやアイルランドといったヨーロッパの運動について一定の理解を示しつつ、自治や独立したネイションの確立を目指す政治運動には慎重な態度を堅持している。

作家の狙いは特定のイデオロギーを擁護することではなく、ネイション＝ステイトという共同体の形成をめぐって、さまざまな国籍、人種、民族、社会的地位にある人間がどのように行動し、どのように思考するかを、その複雑な因果関係や思考過程も含めて、そのまま提示することにあったと言えるだろう。作品の登場人物の国籍は、一見、瑣末事にもみえるが、人物の土地や国家との関係性を決定づける重要なファクターとして周到に用意されたものである。ネイションと人間の関係をめぐる重層的な考察は、さまざまな土地に滞在し、さまざまな国籍の友人と交際した作家の人間観察の賜物なのである。

以上、見てきたように、戦後さまざまな土地で遭遇したナショナリズム運動を作品化するにあたり、ロレンスはつねに少数者の存在に配慮・共感する姿勢を見せた。そのネイション＝ステイト観の基礎には、大戦期のイギリスでスパイ容疑をかけられ、監視下に置かれたこと、すなわちネイション＝ステイトの外部者としての被抑圧経験があった。戦後も、作家は事件の屈辱の記憶に苛まれていたが、だからこそ同様にネイション＝ステイトの周縁部に位置する移民、外国人、少数民族に共感し、多数者を形成する他のイギリス人主権者とは異なる視点から彼らを描くことができる立場にあった。ロレンスは民主主義への懐疑や指導者原理への期待を表明し、全体主義との親和性をみせた部分もあったが、本論文の考察を通して、それらの主張はむしろ、大衆デモクラシー時代の到来によって人間の画一化が進み、多数派が自由と民主主義を謳歌する一方で、共同体と利害の一致しない少数者が抑圧を被ることを危惧する気持ちから言われたものであったことが明らかになった。